

## 序

姫路市では現在、約 1200 箇所もの遺跡が知られています。古くは旧石器時代から新しく江戸時代まで、遺跡の種類も多岐にわたっており、この地が永く人々の生活の舞台として賑わってきたことが窺えます。これらの遺跡でおこなわれる発掘調査によって、私たちは先人の営みに触れるとともに、古来の生活の知恵など、現代の生活とも関わりの深いさまざまな情報を得ることができるのです。

今回発掘調査をおこないました豊沢遺跡は、姫路平野に営まれた弥生時代からの遺跡です。調査成果の一部は新聞やテレビでも紹介されましたが、古くから学会にその名を知られながら長らく実態が明らかでなかった本遺跡で、初めて堅穴建物などの遺構が発見されたことは、大きな成果といえるでしょう。

ここに調査成果をとりまとめ、豊沢遺跡はもとより、姫路市内に数多く残されている弥生遺跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました学校法人摺河学園をはじめ、関係者各位に心より御礼申し上げます。

平成 25 年（2013 年）

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

## 例言

1. 本書は姫路市豊沢町 83 番地に所在する豊沢遺跡（県遺跡番号：020457）の第 4 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は兵庫県播磨高等学校内における学校施設建設に先立つもので、姫路市教育委員会が実施した。
3. 確認調査（調査番号：20120027）・本発掘調査（調査番号：20120061）は、ともに姫路市埋蔵文化財センター 黒田祐介が担当した。
4. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（TP）を基準とした。

5. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。

6. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。

竪穴建物→SH 掘立柱建物→SB 土坑→SK ビット→P

なお本書で使用する遺構番号は、遺構の新旧関係を必ずしも示すものではない。

7. 整理作業は、平成 24 年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。
8. 本書の執筆・編集は、黒田がおこなった。
9. 本書に掲載した遺構図の縮尺は、竪穴建物平・断面図 1/50、通常の土坑平・断面図 1/30、大型の土坑平・断面図 1/50、総柱建物平・断面図 1/80、ビット断面 1/30 を基本としている。遺物実測図は、土器 1/4、石器のうち石鏃 2/3、石庖丁 1/2、砥石・台石・磨石 1/4 である。
10. 本書に掲載した遺物実測図のうち、弥生土器 1 点（掲載番号 32）と石器は姫路市埋蔵文化財センターで実測・トレースをおこなった。それ以外は、株式会社地域文化財研究所に委託した。
11. 弥生土器・古式土師器の編年は主に、長友朋子編 2007『弥生土器集成と編年―播磨編一』（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第 5 号）大手前大学史学研究所、を参照した。また中世須恵器に関しては、森田 稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」（『神戸市立博物館研究紀要』第 3 号 神戸市スポーツ教育公社、森内秀造 1995「相生窯址群における編年の再考」（『相生市・緑ヶ丘窯址群 II』（兵庫県文化財調査報告第 139 冊）兵庫県教育委員会、を参照した。
12. 出土した鉄片、褐鉄鉾、ガラス滓に関しては、村上恭通氏（愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター）に鑑定・御教示をいただいた。ただし、文中の表現や認識に誤りがある場合の責はすべて編者にある。
13. 鉄片・褐鉄鉾等の微細遺物、石器石材の鑑定は目視による。分析はおこなっていない。
14. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
15. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。（敬称略、五十音順）

奥原のみ 学校法人摺河学園 株式会社福原組 新納 泉 松岡秀樹 松木武彦 村上恭通 山田清朝  
有限会社松浦興業

## 目次

<b>第1章 遺跡を取り巻く環境</b>	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 豊沢遺跡における既往の調査	2
<b>第2章 調査に至る経緯と経過</b>	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 確認調査	3
第3節 本発掘調査	4
<b>第3章 調査の成果</b>	
第1節 縄文時代の遺物	5
第2節 弥生時代の遺構・遺物	5
第3節 庄内式併行期、布留式期の遺構・遺物	12
第4節 中世の遺構・遺物	16
第5節 時期不明の遺構	16
<b>第4章 総括</b>	
第1節 集落の立地	17
第2節 時期別の遺構の変遷	17
第3節 生産活動	18

---

---

## 巻首図版目次

巻首図版1：(上) 全景	(下) 遺構検出状況		
巻首図版2：(上) SK8・20	(中) SK8 土層断面	(下左) SK8 焼土塊出土状況	(下右) SK8 灰赤色土検出状況
巻首図版3：SK8 出土遺物			
巻首図版4：(上) SH2 炉	(中) SH2 炉 南北土層断面南半	(下) SH2 炉 東西土層断面西半	

## 表目次

表1 土器観察表
表2 石器観察表

## 図版目次

- 図版 1 : 図 1 周辺の弥生時代の遺跡 図 2 調査区位置図  
図版 2 : 図 3 調査区平面図  
図版 3 : 図 4 調査区断面図  
図版 4 : 図 5 遺構平・断面図  
図版 5 : 図 6 SK21~26 平・断面図  
図版 6 : 図 7 SH6 炭・焼土検出状況平・立面図 図 8 SH6 平・断面図  
図版 7 : 図 9 SK8・20 平・断面図 図 10 SK8・20 平面図 図 11 SK19 平・断面図  
図版 8 : 図 12 SH3・4 平・断面図  
図版 9 : 図 13 SH2 平・断面図  
図版 10 : 図 14 SH1 (古) 平・断面図 図 15 SH1 (新) 平・断面図  
図版 11 : 図 16 SH5 平・断面図 図 17 P63 平・断面図 図 18 SB1 平・断面図  
図版 12 : 図 19 時期別遺構配置図  
図版 13 : 図 20 土器 (1~16)  
図版 14 : 図 21 土器 (17~31)  
図版 15 : 図 22 土器 (32~44)  
図版 16 : 図 23 土器 (45~57) 図 24 石器 (S1~14)

## 写真図版目次

- 写真図版 1 : (上) SK3 1層土器出土状況 (中) SK3 (下) SK5 炭層検出状況  
写真図版 2 : (上) SK13 土器出土状況 (中) SK15 土層断面 (下) SK14 炭・土器検出状況  
写真図版 3 : (上) SK16 土器出土状況 (中) P46 (下) SK22・26 土層断面  
写真図版 4 : (上) SK25・26 (中) SK25 土器出土状況 (下) SK22  
写真図版 5 : (上) SH6 屑 炭検出状況 (中) SH6 炭・焼土検出状況 (下) SH6  
写真図版 6 : (上) SK20 土器出土状況 (中) SK20 台石・磨石出土状況 (下) SH3・4・SK19  
写真図版 7 : (上) SH2 (下) SH2 炉 炭層除去後  
写真図版 8 : (上) SH1 [新] (下) SH1 [古]  
写真図版 9 : (上) SH1 東西土層断面 (中) SH1 炉 (下) SH1 [新] 土器出土状況  
写真図版 10 : (上) SH5 (中) P63 土層断面 (下) SB1  
写真図版 11 : (上) 2次調査全景 (下) SD2 遺物出土状況  
写真図版 12 : 土器 2・3・12・16・18・20・21・22  
写真図版 13 : 土器 26・28・30・32・36・43・45  
写真図版 14 : 土器 48・56 石器 S1~14 金属 M1~3  
写真図版 15 : SK8 焼土塊 SH1 不明土製品

## 第1章 遺跡を取り巻く環境

### 第1節 地理的環境

豊沢遺跡は姫路市豊沢町に所在する。姫路市は兵庫県南西部に位置しており、平成18年(2006年)3月27日に飾磨郡家島町・同夢前町・宍粟郡安富町・神崎郡香寺町との合併を経て、その市域を拡大した。市域の面積は534.43km<sup>2</sup>、人口は536,323人である(平成25年1月1日現在)。また平成8年(1996年)4月1日には中核市に移行した。姫路は古代以来播磨国の中心として発展してきた。現在でも、JR山陽本線・JR姫新線・JR播但線・JR山陽新幹線・山陽電気鉄道・国道2号・山陽自動車道・播但自動車道が通っており、交通の要衝としての役割を果たしている。

豊沢遺跡は、市川と夢前川によって形成された姫路平野の中央部に位置している。JR姫路駅から南へ約300mに位置し、兵庫県播磨高等学校を中心とした一帯が遺跡の範囲として把握されている。

### 第2節 歴史的環境〔図1〕

豊沢遺跡周辺では多くの遺跡が知られており、特に弥生時代の遺跡が集中している地域である。これらの遺跡は、豊沢遺跡から西約1kmに位置する手柄山と船場川流域に集中する傾向がある。

豊沢遺跡から東約300mに位置する北条遺跡(2)では縄文時代から平安時代の遺構・遺物が確認されている。弥生時代のものとしては後期の堅穴建物や溝が見つかり、前期の土器も出土した。

南畝町遺跡(4)は、豊沢遺跡から北西へ約700mに位置する。弥生時代の溝を確認した。

千代田遺跡(9)は、豊沢遺跡から北東約1kmに位置する。遺跡発見当時は千代田貝塚と呼ばれ、杉原荘介ら日本考古学協会弥生式文化総合研究特別委員会によって発掘調査がおこなわれたことでも知られる。出土遺物として縄文土器や弥生時代前期から中期にかけての土器のほか、弳形角製品が知られている。

西延末遺跡(10)は豊沢遺跡から西へ約1kmに位置する。弥生時代後期の堅穴建物、溝を検出した。ほかに弥生時代中期の土器も出土した。

西約700mに位置する橋詰遺跡(11)は、昭和35年(1960年)に浅田芳朗氏、今里幾次氏らによって発掘調査が実施され、弥生時代全時期から古墳時代初頭にかけての遺物が出土した。特に現在庄内式土器と呼ばれる土器群を弥生土器と分離し、「橋詰式」と呼称したことで知られる学史上重要な遺跡である。

南西約1kmの小山遺跡(12)は今里幾次氏によって発掘調査が続けられた遺跡で、堅穴建物や土坑、溝状遺構からは杭列が確認された。出土した弥生時代前期から中期にかけての土器を、今里氏は「播磨弥生式土器の動態」(今里1969)の中で播磨の弥生土器編年の標識として位置付けた。今里氏の弥生土器研究を紐解く上で欠くことのできない遺跡である。また平成20年(2008年)から翌年にかけて、姫路市教育委員会による発掘調査が実施された(福井2009)。

手柄山東麓を流れる船場川流域では竹の前遺跡(15)、畑田遺跡(16)、長越遺跡(19)、権現遺跡(22)など多くの遺跡が知られる。そのうち、土地画整理事業に伴って発掘調査がおこなわれた畑田遺跡(旧仮称船場川東区整遺跡第6地点)では、弥生時代中期から庄内式併行期にかけての遺構がまとまってみつかった。遺構としては円形周溝墓、堅穴建物、土坑、柵、溝がみられる。出土遺物として銅鏃も知られている。また畑田遺跡から船場川をはさんで約100m西に位置する長越遺跡では、庄内式併行期の集落跡が発掘された。そこからは大量の古式土器器が出土し、そのうち大溝出土土器が「長越Ⅰ式」から「長越Ⅲ式」に編年されている(松下・渡辺ほか1978)。また権現遺跡でも弥生時代後期の堅穴建物や溝が検出された。溝からは盾、梯子等の木製品が出土した。

### 第3節 豊沢遺跡における既往の調査〔図2〕

姫路市教育委員会では、豊沢遺跡において平成22年（2010年）以降確認調査を含め4次にわたる発掘調査を実施してきた。

本節では、そのうち第1次・2次調査の概要をまとめる。また姫路市教育委員会の調査以前に、遺跡の状況や出土遺物について触れられている論文が管見によれば2本確認している。以下ではそれらについても調査前史として触れる。

#### 1. 調査前史

高橋健自氏は、大正12年（1923年）の論文の中で「播磨國姫路市の内豊澤村字芝原に於ても貨泉一個が他未詳古銭二個と伴出したり（和田千吉氏）」（高橋1923：p.37）と記述している。出土状況等詳細は不明であるが、その当時から遺跡の存在は知られていたようである。なお当の貨泉は、現在下関市立長府博物館に所蔵されている。

松岡秀樹氏は、論文の中で豊沢遺跡の広がりに関して記述している（松岡1985）。その中で遺跡は、鍛冶屋遺跡と呼称されている。遺物包含層の発見は、工事によるものである。その1は、兵庫県播磨高等学校の東通用門とグラウンドをささむ土道を姫路市が排水溝拡張のため南北20m、東西幅30cm、深さ20cmほど掘削した際に黒色有機土層を確認し、その中に多数の弥生土器が包含されていたとされる。また先述の地点から西約40m、同校新館工事中にも黒色有機土層を確認し、弥生土器が多数包含されている状況が見られたという。また正門改修工事に伴って弥生土器が発見されている。以上の工事で発見された弥生土器は、弥生時代中期から後期に属するものである。

#### 2. 第1次調査（遺跡調査番号：20100098）

豊沢町79番地におけるWDB株式会社本店ビルの建設工事に先立って、確認調査を実施した。調査面積は24㎡（2×2mの坪を計6箇所）、調査期間は平成22年（2010年）7月4日・7日である。全ての調査区で弥生時代の包含層を確認し、土層の堆積状況から流路跡の存在が明らかとなった。また弥生土器がまもって出土した。

#### 3. 第2次調査（遺跡調査番号：20100132）

確認調査の結果を受けて、本発掘調査を実施した。調査面積は432㎡、調査期間は平成22年（2010年）11月26日から平成23年（2011年）3月4日である。

調査区南東部では、微高地を確認し、そこから北西へ地形が緩やかに傾斜する状況がみられた〔写真図版11上〕。微高地は標高約8.7m、傾斜部分の最深部は標高約7.3m、標高差は1.4mである。土層の堆積状況からこの傾斜地は洪水等で埋没したことが判明している。溝のうち最も幅の広いSD2からは、弥生時代中期後半（IV-2期）の土器がまもって出土した〔写真図版11下〕。また地形の落ちに堆積した土層からは、弥生時代中期後半（IV期）の土器を中心に、瀬戸内甕やタタキ甕も出土した。

以上から、豊沢遺跡の集落域は調査区のさらに東側にある兵庫県播磨高等学校内に広がっている可能性が高まった。また出土した遺物から弥生時代前期後半から後期にかけて営まれた遺跡であることが明らかになった。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

姫路市豊沢町83番地において、学校法人摺河学園（兵庫県播磨高等学校）による学校施設建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である豊沢遺跡（遺跡番号：020457）に該当している。このことから、平成24年（2012年）4月27日に確認調査（遺跡調査番号：20120027）を実施した。この際、堅穴建物1棟・土坑1基・ピット5基を確認し、地山が良好な状態で残存していることが明らかとなった。また検出した地山の標高が第2次調査調査区の微高地端より高いことから、豊沢遺跡の集落域に該当している可能性が高まった。以上から、学校法人摺河学園と協議をおこない、建設工事予定地全面を対象として本発掘調査を実施することとなった。本発掘調査の現地調査期間は、平成24年（2012年）5月29日から同年7月6日である。

現地調査開始から整理作業終了までの調査体制は、以下のとおりである。

#### 姫路市教育委員会

教 育 長 中杉隆夫

教育次長 林 尚秀

#### 生涯学習部

部 長 小林直樹

#### 文化財課

課 長 福永明彦

係 長 大谷輝彦（調整・事務）

#### 埋蔵文化財センター

館 長 秋枝 芳

係 長 岸本幸男（庶務）

森 恒裕（事務）

技術主任 小柴治子

中川 猛（調整・事務）

福井 優

南 憲和

技 師 堀本裕二

主 事 嶋田 祐（庶務）

技 師 補 黒田祐介（調査・整理）

整理補助員 覚野郁子、黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代

### 第2節 確認調査（第3次調査、遺跡調査番号：20120027）

調査は姫路市埋蔵文化財センター 技師補 黒田祐介が担当し、平成24年（2012年）4月27日に実施した。

以下ではその概要を報告する。

当初、工事予定地 122.32 m<sup>2</sup>のうち 8 m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査区は 1×2m で、工事予定地西辺沿いに 3

箇所、東辺に1箇所の計4箇所に設定した。調査区は、西辺北端から南へ1・2・3区、東辺沿いのものを4区と呼称する。なお4区は調査の都合上西へ3.5m拡張したため、最終的に1×5.5mの調査区となった。このため、総調査面積も11.5㎡に増加した。掘削は1区・2区・3区・4区の順におこなった。遺構検出は、厚さ約0.8mの盛土および厚さ約5cmの耕土を除去した面（地山上面）でおこなった。

**1区** 耕土直下の標高9.1mで明黄褐色土層（地山）を検出した。厚さは約15cmで、下層は灰色砂礫層である。明黄褐色土層からピットが2基掘りこまれていた。深さは約20cmで、時期を特定しうる遺物は出土していない。

**2区** 西側に向かって砂礫層が高まり、東半では砂礫層上に明黄褐色土層が堆積している様子が認められた。土坑1基とピット1基を確認した。なおこの土坑は本発掘調査のSK3に対応し、ピットはSB1に伴うものである。

**3区** 遺構はなかったが2区と同様の土層の堆積状況が確認できた。

**4区** 調査区全面で遺構埋土とみられる灰褐色土層を確認した。遺構の深さと性格の確認を目的に、北壁・西壁際でタチワリをおこなったところ、炭の広がりを確認した。断面では凹みに炭が堆積し、その周囲に地山を利用した土手が築かれている様子がみられた。また遺構の規模と残存状況を確認するために、調査区を西に3.5m拡張したところ、拡張部分も同様の遺構埋土が広がっていた。規模および炉の存在から、この遺構が堅穴建物の可能性が高いと判断した。また埋土上面に灰白色の埋土をもつピット2基を確認している。上記の堅穴建物は本発掘調査のSH2に対応し、ピットはSB1に伴うものである。

以上のように、調査区内では建物基礎等による大規模な攪乱は認められず、地山が良好に残存していることがわかった。また確認した遺構として堅穴建物、土坑、ピットが挙げられる。以上から、本発掘調査が必要であると判断した。

### 第3節 本発掘調査（第4次調査、遺跡調査番号：20120061）

平成24年（2012年）5月29日から同年7月6日にかけて実施した。実働日数は22日である。調査は姫路市埋蔵文化財センター 技師補 黒田祐介が担当した。調査対象面積は、建設工事予定地全面である122.32㎡である。

確認調査で確認していたとおり、調査区内は攪乱が少なく、ほぼ全域で耕土が地山を覆っている状態で遺構の残存状況も良好であった。

盛土および耕土除去後の標高約9.1mで遺構検出をおこなった。遺構は調査区西壁沿いでは砂礫層上で、それ以外では明黄褐色土層上で検出した。

検出遺構は堅穴建物6棟、土坑21基、ピット約70基、総柱建物1基である。総柱建物は中世のもので、ピットの大半は詳細な帰属時期は不明である。それ以外は弥生時代中期、庄内式併行期にかけてのものが大半を占める。

記者発表は7月5日におこない、新聞各紙、テレビで調査成果が報道された。また兵庫県播磨高等学校の生徒、教職員を対象とした説明会を7月3日・4日・6日・7日におこない、約100人の参加を得た。調査終了後の11月2日・3日におこなわれた学芸発表会では発掘調査に関するポスターを掲示し、調査成果の一部を公開した。

そのほか、姫路市埋蔵文化財センターでは8月から12月まで、調査速報というかたちで出土遺物と調査成果をまとめたパネルを展示した。



## 第3章 調査の成果

### 第1節 縄文時代の遺物

今回出土したのは、縄文土器1点である。遺構面検出・精査時に出土した。縄文時代後期前葉、縁帯文土器群に属する。波状口縁の凸部にはゆるやかに「U」字を描く沈線が4条施される。

### 第2節 弥生時代の遺構・遺物

竪穴建物3棟と土坑16基、ピット1基を弥生時代の遺構として確認している。そのすべてがⅡ期またはⅣ期に属するものである。調査の結果、若干の例外を除いてこの時期の遺構の埋土（平面検出時）は褐灰色を呈することが判明した。そのため、時期を特定しうる遺物が出土しなかったものでも、埋土の色調からこの時期に含めた遺構がある。

#### SK3〔図5-①〕

調査区中央西壁寄りで見出された。P37に切られる。

平面形は正円形を呈し、直径約1.5mを測る。検出面から最深部までの深さは約0.6mを測り、底面は平坦である。

埋土は8層からなる。1・2・8層では炭粒が含まれていた。7・8層は周囲の砂礫層、砂層を主体とする土層である。

遺物は各層から出土しているが、特に1層からは甕(3)・壺(4)が見つれた状態で出土した〔写真図版1上〕。1層上面では磨製石庖丁(S7)が見つかった。

出土土器には甕のほか、広口壺がみられる。出土遺物のうち、甕(1~3)と壺胴部(4・5)、磨製石庖丁(S7)、砥石(S10)を図化した。ほかに逆L字口縁甕と少量のサヌカイト剥片も出土している。2は半裁竹管を用いて沈線文を施している。5は篋描の沈線文が施されている。S10には明確な使用痕はみえない。使用した可能性があるのは図の右側側面のみで、他面はなだらかな凹凸がみられる。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK4〔図5-②〕

SH3の南で見出された。SH3およびSB1-P10に切られる。

平面形は正円形で、直径約1.1mを測る。検出面から最深部までの深さは25cmで、底面は平坦であった。埋土は3層からなる。2層には炭粒が稀に含まれていた。

出土遺物は少ないが、頸部に断面三角形突帯が4条以上めぐる広口壺や甕が出土した。そのうち甕(6)を図化した。ほかに少量のサヌカイト剥片が出土した。

出土遺物はⅡ期のものが主体を占める。

#### SK5〔図5-③〕

SH1の西側で見出された。他の遺構との切り合い関係はない。

平面形はやや不整形な楕円形を呈し、長軸約1.1m、短軸約0.8mを測る。検出面から最深部までの深さは10cmである。

埋土は2層からなる。2層上面では炭が薄くたまっており、焼土も稀に含まれていた。この炭は土坑中央部の径0.5mの範囲で顕著であり、その周辺では非常に薄くなる。また土層断面では、2層中には一連ではないものの薄い炭層が2単位みられた。ただしこれらは面的に確認できていない。底面では炭や被熱痕跡はみられなかった。堅穴建物に伴う炉跡である可能性もあるが、後世の削平のため上部構造やピットなどの関連遺構の有無は不明である。

遺物は少量出土した。そのうち甕(7・8)を図化した。ほかに少量のササカイト剥片が出土した。出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK6 [図5-④]

SK5の西で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

平面形は細長い楕円形を呈する。長軸約1m、短軸約40cmを測る。検出面から最深部までの深さは45cmであり、短軸断面は「U」字形を呈する。埋土は5層からなる。4・5層は地山である砂礫層・砂礫層を主体とする土層である。

細長い平面形に比べ深いなど、特徴的な遺構である。

遺物は少量出土している。そのうち甕と鉢を図化した(9・10)。鉢は外面にミガキ状の痕跡が斜めにみえる。報告例は少ない。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK13 [図5-⑤]

調査区西壁沿いで検出した。P37に切られる。

遺構の半分は調査区外であるため全形を知ることはできないが、平面形は正円形を呈するとみられ、直径1.1mを測る。検出面から最深部までの深さは0.75mである。

埋土は5層からなり、地山である砂礫層、砂層を主体とする土層である。

出土した遺物は多くない。そのうち甕と広口壺を図化した(11・12)。12は頸部に突帯7条に棒状浮文が施される。ほかに篋描文の施された壺胴部も出土している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK15 [図5-⑥]

調査区北東隅で検出した。P55に切られ、SK27を切る。遺構の東半分は調査区外にのびる。

遺構の東半分は調査区外であるため、全形を知ることはできない。平面形は楕円形を呈するとみられ、直径約0.6mを測る。検出面から最深部の深さは約30cmを測る。

埋土は4層からなる。3層は焼土を含み、4層は炭を非常に多く含むものの、被熱痕跡は確認していない。

埋土に炭・焼土が多く含まれていたため、排土は全量ふるい(1mm目)にかけた。その結果、磁石に反応する小粒子を複数確認した。全て1~2mm大の小さなものである。詳細は不明であるが、鉄片ではないとみられる。

遺物は非常に少なく時期を特定することは困難である。1点のみ篋描文が施された壺胴部片が出土している。ほかに焼土塊が数点出土した。後述するSK8出土のもの共通した特徴を持つが、大半はSK8出土のものより小さい。

検出時の埋土の色調が褐灰色を呈していたことから弥生時代中期に属す可能性は高い。さらに先述の壺胴部片からⅡ期に属す可能性がある。

#### SK14〔図5-⑦〕

調査区南東隅で検出した。SK16を切る遺構である。

遺構の大部分が調査区外に広がっているため全形を知ることはできないが、平面形は方形を呈する可能性がある。検出面から最深部までの深さは約0.6mを測る。

埋土は12層（1～12層）からなる。5層上面には炭層が広がっていたが、被熱痕跡は確認していない〔写真図版2下〕。7層には炭が多く含まれていた。10・11層は明黄褐色地山を主体とした土層である。人為的に面を整えている可能性もある。

出土遺物のうち、甕と壺（13～15）、砥石（S11）を図化した。特に15は在地の土器に比べて赤みが強く、胎土には角閃石らしき黒い粒子が含まれている。以上の特徴から、15は搬入土器である可能性が高い。図化したもののほかに、頸部に断面三角形突帯が8条以上めぐる広口壺頸部、大型の壺底部、平基式石鏃が出土している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK16〔図5-⑦〕

調査区南東隅で検出した。SH1・SK14・SK23に切られる。

遺構の大部分は調査区外に広がっているため、全形を知ることはできない。ただし平面形および土層断面から、東から西へ伸びる溝状の遺構である可能性がある。幅は1.3m以上、検出面から最深部までの深さは約0.5mを測る。埋土は2層（13・14層）からなる。

遺物の出土量は、今回検出した遺構の中で最も多い遺構の1つである。13層中からは土器がまとまって出土した。そのうち、比較的残りのよかった壺（16）と甕（17・18）を図化した。砥石（S12）も出土している。S12には使用痕とみられる斜め方向の浅い凹みが認められる。ほかに刻目のつく突帯をめぐらせた広口壺頸部や6条以上の突帯がめぐる壺胴部、刻目のつく突帯が4条以上めぐりその下に円形浮文が施された土器片も出土した。サヌカイト剥片も少量出土している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK26〔図6〕

調査区南東隅東壁際で検出した。SK22・SK25に切られる。

平面形は不整形な長方形を呈する。遺構の一部が調査区外に広がっているため、全形をうかがい知ることはできない。短軸約1.2m、検出面から最深部までの深さは約20cmを測る。埋土は1層（図6-26層）からなる。埋土には炭が含まれていた。

出土遺物のうち、甕（19）と無頸壺（20・21）、壺胴部片（22）、不明底部（23）、石鏃（S1、S2）、石鏃（S6）を図化した。22には柳描流水文が描かれている〔写真図版12-22〕。姫路市内では他に12点が知られているのみである（藤岡2009）。この個体は平行する4条1単位の柳描文を、一部ナデ消して円弧を描くことで流水文を表現している。そのほかに広口壺や外反口縁甕、外面に舌形の把手がつく外反口縁甕とみられる破片が出土した。少量のサヌカイト剥片も確認している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

【註】SK26の平面形はSK22とほぼ重複しており、形状も共通している。SK26とSK22が同一、一連の遺構である可能性もあったが、図6-9・10層が26層と色調等が大きく異なることからSK26の埋土を26層のみとした。このことから26層と2・3層(SK22埋土)との関連がないものとして判断し、また後述するようにSK22出土土器はⅣ期に属するものが主体を占めることから、別の遺構として報告する。

#### SK25〔図6〕

調査区南東隅東壁際で検出した。SH1・SK21・SK22・SK23・SK24に切られ、SK26を切る。

平面形は不整形で、南北長約4.4mを測る。一部調査区外に広がっているため全形を知ることはできない。検出面から最深部までの深さは約0.6mである。

埋土は19層(図6-7~25層)からなる。上層(7~17・19・20層)、中層(18・21層)、下層(22・23層)、最下層(24・25層)に分けて掘削をおこない、適宜面を整えて検出作業をおこなった。22層上面で径約20cmの範囲で被熱痕跡を確認したが、他の痕跡は認められなかった。底面では完形の甕(26)が残されており、その直ぐ北で被熱痕跡が認められた。

出土遺物のうち、甕(24~26)と石織(S3)を図化した。ほかに逆L字口縁甕と少量のサヌカイト剥片が出土している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

【註】SK25の土層の堆積状況は、通常の土坑の埋没状況とは異なる。上記の通り土層を大別して掘削し、適宜精査をおこなったが明確に遺構を分けることはできなかったため、1つの遺構として報告する。

#### SK23〔図6〕

調査区南東隅東壁際で検出した。SH1に切られ、SK16・SK25を切る。

一部調査区外に広がっているため全形を知ることはできない。平面は不整形で、南北長約1.2m、検出面から最深部までの深さは約30cmを測る。埋土は3層(図6-4~6層)からなる。

出土遺物のうち、甕と広口壺を図化した(27・28)。28は突帯状に貼り付けた粘土をつまみ上げることでトゲ状の突起を表現している。

出土遺物の帰属時期はⅡ期である。

#### SK22〔図6〕

調査区南東隅東壁際で検出した。SH1に切られ、SK25・SK26を切る遺構である。

遺構の一部は調査区外に広がっているため、全形を知ることはできない。短軸は最大約1.3m、検出面から最深部までの深さは約30cmを測る。埋土は2層(図6-2・3層)からなり、炭が含まれていた。底面は比較的平坦である。

平面検出時の埋土の色調は黒灰色に近く、他の中期の遺構が褐色を呈するのと特徴を異にしていた。

出土遺物のうち、甕、壺、高杯を図化した(29・30・31)。30は柳描流水文が施された壺胴部片である〔写真図版13-30〕。先述の通り姫路市内での出土は珍しい。この個体の柳描文は稚拙な感を受ける。文様の切り合い関係は不明瞭な部分もあるが、以下のように施文順序を整理できる。流水文内の柳描文を先に描き、その外側に弧を2本描く。そのうち内側の弧は柳描文と直交する部分のみで、全周しない。その後上下に多

条の櫛描文を描き、最後に不明瞭になった流水文部分を再度なぞるといふ順序である。ほかに高杯脚部に鋸歯文が描かれる個体、サヌカイト剥片も出土した。

出土遺物はIV期のものが主体を占める。

#### SH6〔図7・8〕

SH3の北側、調査区北壁沿いで検出した。SK2・P63に切られる。北隅の一部が調査区外に延びる。

平面形はほぼ正方形を呈し、北西-南東幅1.8m、北東-南西幅2.2mを測る。北東の一边のみ地山が内側に張り出している。検出面から床面までの深さは約30cmである。

埋土は3層からなる。1・2層を除去したところ、遺構側面から床面にかけて炭・焼土が検出された。特に遺構南隅では、検出時から遺構の輪郭に沿って炭が残存している状況を確認していた〔写真図版5上〕。炭は炭化材材のものと同様膜状に広がっているものがみられた。炭化材は幅5cmから10cm程度のもので、原形を留めるものはなかった。大半は床上に広がっていたが、一部側面に貼りつくものも認められた。また南西辺付近には焼土が多く含まれる土層が堆積していた。

3層除去後、屋内施設として周壁溝・小柱穴を確認した。

周壁溝は三辺で確認した。東隅では周壁溝が北東辺沿いに屈曲する箇所がみられたが、それ以上延びることはない。周壁溝は幅約5cm、深さ約3cmを測る。断面「U」字形ないし「V」字形を呈する。先述の炭化材のうち、側面に貼りつくものは堅穴壁に立て並べた材の可能性がある。ただし木目が垂直ではなく斜めを向いているため、断言はできない。

小柱穴は7基確認した。これらは本遺構の北半に集中する。平面形は円形を呈し、掘方径は7cm前後、床面からの深さは10cmから20cmを測る。木の根の可能性もある。

炬は確認していない。

SH6の西側で、炭層が薄く広がっていた〔写真図版5中〕。炭の間に焼土も含まれていたが、被熱痕跡は確認していない。この炭の広がりやSH6の関係は不明であるが、関連がある場合SH6に高床部が伴っていた可能性がある。

埋土に焼土・炭が含まれていたため、排土をふるい(1mm目)にかけた。3層および南西辺周辺の焼土層は全量おこなった。その結果、3層からは鉄片1点が出土した〔写真図版14-M1〕。長さ9mm、幅5mm、厚さ2mmを測る。焼土層からも鉄片らしきものが出土した。こちらは磁気を帯びていない。長さ10mm、幅7mm、厚さ3mmを測る。2・3層からは他にも磁石に反応する小粒子が出土している。

ほかの出土遺物としては、床面でつぶれた状態で出土した直口壺(32)がある。口縁が「U」字形に欠けている。排土のふるいでも確認できていないことから、使用時に打ち欠かれていた可能性がある。ただし打ち欠きに伴う打点は確認していない。ほかに少量のサヌカイト剥片を確認した。

出土遺物の帰属時期はIV期である。

#### SK2〔図3・4〕

調査区北壁沿いで検出した。SH6を切る遺構である。

平面形は壺で、深さ約0.5mを測る。

時期を特定しうる遺物はない。検出時の埋土の色調が褐灰色を呈していたことから判断すると、弥生時代中期に帰属する可能性がある。

## SK8 [図9・10]

調査区北東隅で検出した。西側半分に攪乱をうける。

攪乱のため、本来の平面形および平面規模は不明である。検出面から最深部までの深さは約0.8mを測る。

埋土は6層からなる。1層は炭を含まず、平面検出時は不整形であった。また1層除去後には遺構の明確な層はほとんど見られずなだらかに傾斜していた。3層以下の平面形が1層に比べて極端に小さくなることから、1層は別の遺構である可能性がある。2層は南側に接するSK20の埋土で、それ以下3・4・5・6層がSK8に伴う埋土である。3層には炭・焼土が多く含まれており、掘り下げにともなって土器とともに焼土塊が出土した。この場で火を焚いた痕跡は確認していない。4層は明黄褐色の地山主体の層で、5層上面の凹みを埋めるように堆積していた。6層下半には炭が含まれていた。土坑底面では、灰赤色土が薄く堆積していた〔巻首図版2下右〕。後述するように、褐鉄鉱が出土したことが関連する可能性がある。

断面観察により、埋土中に炭、焼土が多く含まれていることが判明したため、排土は全量ふるい(1mm目)にかけた。その結果、3・5・6層から微細遺物を確認した〔巻首図版3〕。

3層では鉄片が1点出土している。大きさは5mm、厚みは1mmを測る。片面は褐色、他面は黒褐色を呈するため、鉄器から剥落したものであることがわかる。ほかに磁気を帯びた土塊を多数確認した。これらは大きさ3mm程度で、鍛造等に際して飛散した微細な鉄片が溶脱し、土を取り込んだものである。なおこの層から見つかったササカイト剥片は磁気を帯びている。

5層からは最も多くの微細遺物が出土した。うち鉄片は1点のみである。長軸11mm、短軸6mm、厚さ1.5mmを測る。大半は褐鉄鉱が占める。大きさは1mmから7mmで、色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)から赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。今回出土した褐鉄鉱は全て磁気を帯びる。ほかに大きさが30mm前後のものが3点出土しているが、褐鉄鉱か否か判断ができていない。他にガラス滓2点と被熱した骨片が出土している。ガラス滓は灰オリーブ色(5Y5/2)を呈し、軸葉のような光沢を帯びる。表面は発泡しており、砂粒を取り込んでいる。1点は横幅13mm、縦幅11mm、厚さ5mmを測る。もう1点は横幅11mm、縦幅8mm、厚さ5mmを測る。

6層からは褐鉄鉱と骨片が出土した。褐鉄鉱の大半は大きさ3mm程度であるが、大きさ20mm、厚さ5mmのものが1点ある。断面を確認すると、外面は暗赤褐色(2.5YR3/2)、内面は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。その他は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。

以上、微細遺物について概観した。その大半は褐鉄鉱が占めていることがわかる。

他に弥生土器が出土している。出土量は多くないため、時期のわかる資料は全点図化した(33~37)。そのうち、34・35は西側攪乱からの出土であるため、SK8に伴う確実性は他の資料に比べて劣る。ほかにササカイト剥片が少量出土している。

3層から出土した焼土塊〔写真図版15〕は、にぶい黄褐色(10YR7/4)を呈し、部分的に灰色がかかる箇所がみられる。胎土は精良で、砂粒は確認できない。中には棒で突いたような痕跡が残るものや径7mmの孔があくものがある。これらは土器焼成の覆い焼きに関連する可能性があるが、土にササなどが含まれていないことから他の用途を考えるべきかもしれない。

出土遺物の帰属時期はIV期である。

## SK20 [図9・10]

SK8の南で検出した。SK8の土層断面から、SK8を切るとみられる。

攪乱を受けているため本来の規模は不明である。現状で平面形円形、径約 0.9m を測る。検出面から最深部までの深さは約 0.6m である。

埋土には炭が多く含まれていた。また底には厚さ約 10cm で地山主体の灰色混じり明黄褐色土層が堆積しており、その上面では甕底部 (38) が据わっていた。またこの土層を掘り下げると、台石 (S13) と磨石 (S14) が置かれていた〔写真図版 6 上〕。なお台石は正位置で据わっていた。S14 には磨痕はみられず表面も若干ざらついているが、敲打痕もみられないため磨石とした。

出土遺物の帰属時期はIV期である。

#### P46〔図 5-⑧〕

調査区南西隅で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

平面形はほぼ正円形で、直径 0.55m を測る。検出面から最深部までの深さは 30cm である。

埋土は 3 層からなる。柱の痕跡は確認していない。底面からは壺底部 (39) が出土した。

出土遺物の帰属時期はIV期である。

#### SH5〔図 16〕

調査区北西隅で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。

遺構の大半が調査区外であるため平面形・平面規模は不明で、検出面から床面までの深さは 5cm を測る。屋内施設として、周壁溝を確認した。

周壁溝は断面「U」字形を呈し、深さ 5cm を測る。二重にみられる箇所があるため、建物の建て替えがなされているものと考えられる。

時期を特定しうるのはIV期の高杯 1 点のみであるが、埋土の色調からも中期に帰属する可能性が高い。

#### SH7〔図 3・4〕

調査区東壁沿いで検出した。SH2 に切られる。

遺構の大半は調査区外であり、一部攪乱を受けているため全形を知ることはできない。その規模は調査区東壁沿いで約 4.7m を測り、検出面から最深部までの深さは 10cm である。遺構の輪郭線からは、遺構が東に向かってさらに広がっているとみられる。平面規模と底面が平坦であることから、竪穴建物である可能性が高い。ただしこれに伴う周壁溝は確認していない。また中央部で確認した径 0.5m、深さ 25cm の深まりは、柱穴の可能性がある。

遺物として打製石庖丁を転用したとみられる楔形石器 (S8) が出土したが、時期を特定しうるものはない。検出時の埋土の色調から、弥生時代中期に属す遺構である可能性が高い。

#### SK27〔図 3・4〕

調査区北東隅で検出した。SK15 に切られる遺構である。

遺構の半分は調査区外である。平面形は楕円形を呈するとみられ、短軸約 1m を測る。検出面から最深部までの深さは約 20cm である。

時期を特定しうる遺物は出土していないが、検出時の埋土の色調と遺構の切り合い関係から弥生時代中期に属す遺構である可能性が高い。

### 第3節 庄内式併行期、布留式期の遺構・遺物

#### SK24 [図6]

調査区南東隅東壁際で検出した。SH1・SK21に切られる。

平面形は不整形で、長軸約1.4m、短軸約0.8m、検出面から最深部までの深さは15cmを測る。埋土は2層あり、上層には比較的木材の形状を残した炭が多く含まれていた。

出土遺物には、甕と鉢、磨製石庖丁(S9)がある。甕は外面粗いタタキ、内面ハケ仕上げである。

遺物の帰属時期は概ね庄内式併行期である。

#### SK21 [図6]

調査区南東隅東壁際で検出した。SH1に切れ、SK24を切る遺構である。

遺構の一部は調査区外に広がっているため、全形を知ることはできない。短軸は約0.7m、検出面から最深部までの深さは約30cmを測る。

出土遺物は皆無に等しく、詳細な時期は不明である。切り合い関係から少なくとも庄内式併行期から布留式期に帰属することがわかる。

#### SK19 [図11]

調査区中央東寄りで検出した。SH2・SH3に切られる遺構である。SH4との切り合い関係は不明である。

平面形は隅丸長方形で、長軸約3.1m、短軸約2.1mを測る。検出面から最深部までの深さは約0.5mを測る。底面は平坦である。

埋土は14層からなる。埋土は5層以上(上層)と6層以下(下層)に大きく分けられる。上層は遺物を含み、地山ブロックをあまり含まない。一方、下層は上層に比べ色調が明るく、地山ブロックも多く含む。また下層では遺物はほとんど出土していない。このことから下層は人為的に埋めた土層である可能性がある。遺構内で被熱痕跡や炭の層は確認していない。

出土遺物のうち、甕、広口壺、有稜高杯、碗形高杯を図化した(40~44)。また胎土が暗褐色を呈する搬入土器小片のほか、器種不明鉄器片(写真図版14-M3)、少量のサヌカイト剥片を確認している。

出土遺物の帰属時期は庄内式併行期である。

#### SH4 [図12]

SH2の床面で、SH3の周壁溝とともに検出した。SH3に先行する建物である。

SH4はSH2・SH3によって大きく削平されているため、規模や高床部の有無は不明である。

屋内施設として周壁溝と柱穴を確認した。

周壁溝は一部残存しているものも含め、三辺で確認した。幅約10cm、深さ約5cmを測る。

柱穴は3基確認した。本来4本柱であるが確認できなかった柱穴1基はP7によって壊された可能性が高い。P1はSK19掘削中に確認したため掘方の平面形・平面規模は不明である。検出面からの深さは約0.5mを測る。底では根石を確認した。根石は約15cmの角礫である。P2は平面円形を呈し、掘方径約35cmを測る。検出面からの深さは約30cmである。P3はSB1-P5に切られていたため平面形、掘方径は不明である。検出面からの深さは約0.6mを測る。柱穴間距離はP1-P2間で約2.3m、P1-P3間では約2.4mを測る。

時期を特定しうる遺物はないが、平面形、規模等から庄内式併行期のものとして大過ないと考える。



### SH3 [図 12]

SH2の床面で検出した。SH2に切られ、SH4・SK4・SK19を切る遺構である。後述する通り、柱穴の配置が五角形を呈することから、SH2の周囲に広がる埋土がSH3に伴うことがわかった。

平面形は歪な五角形を呈し、一辺約4.5mを測る。また検出面から床面までの深さは5cmから10cmである。SH3に伴う埋土はSH2の外側と周壁溝のみで、床面も削平をうけている。

屋内施設として周壁溝と柱穴を確認した。

周壁溝は、三辺がほぼ完存していた。確認できた周壁溝は、幅5cm、深さ3cmで、断面は浅い「U」字形ないし「V」字形を呈する。

柱穴は5基確認した。P4はSK19の掘削中に確認したため、掘方の平面形、平面規模は不明である。検出面からの深さは約40cmである。P5は平面形は不整形で掘方は長軸1.15m、短軸0.85mを測る。検出面からの深さは0.5mである。P6は平面形正円形で掘方径約0.5mを測る。検出面からの深さは約40cmである。1層からは壺の胴部(45)が出土した。P7は平面円形を呈し、掘方径約40cmを測る。検出面からの深さは約40cmである。P8は平面円形を呈し、掘方径約35cmを測る。検出面からの深さは約0.7mを測る。掘方規模はP5が突出しており、深さではP8が群を抜いている。柱穴間距離は、P4-P5間で約2.6m、P5-P6間で約1.4m、P6-P7間で約1.8m、P7-P8間で約2.45m、P8-P4間で約2.1mを測る。

埋土が非常に浅かったため、平面形は歪であったが、柱穴が整然と五角形に配されていることから、五角形の堅穴建物であることがわかった。

遺物は非常に少なく、時期が分かる資料はP6から出土した壺の胴部(45)のみである。時期を特定しうる遺物は少ないが、遺構の切り合い関係等からも庄内式併行期のものとして大過ないと考える。

### SH2 [図 13]

調査区中央で検出した。SH3・SH4・SH7・SK19を切り、SH1・SK1に切られる遺構である。

平面形は円形で、径約5.6mを測る。検出面から床面までの深さは約10cmである。

屋内施設は周壁溝、柱穴、炉を確認した。

周壁溝はごく限られた範囲でのみ確認した。幅10cm、深さは最深部で5cmを測り、断面台形を呈する。

柱穴は近辺で検出した柱穴のうちSH3・SH4に伴うものとSH3の埋土掘削後に初めて検出したものを除いた結果、SH2に伴う可能性のある柱穴は7基に絞られ、さらに間隔や位置などから5基に絞ることができる。SH2の輪郭上ないし際には設けられている点特徴的である。P1は掘方平面形円形、径約40cmを測る。床面からの深さは約40cmで、底では根石を確認した。根石は径約15cmの円礫である。P2は掘方平面形は楕円形、長軸0.7m、短軸0.5mである。床面からの深さは約20cmである。P3は掘方平面形は円形、径約40cmを測る。床面からの深さは約25cmである。P4は掘方平面形は円形、径約40cmを測る。床面からの深さは35cmである。P5は掘方平面形は円形、径約35cmを測る。床面からの深さは約45cmである。柱穴間距離は、P1-P2間で約2.3m、P2-P3間で約3.2m、P3-P4間で約2.3m、P4-P5間で約2.5m、P5-P1間で約3.7mである。P2-P3間とP5-P1間の間隔がやや広い。

炉は建物の南西側にやや偏って設けられていた。周囲に土手がめぐる構造である。平面形はやや不整形な楕円形を呈し、南北約2.6m、東西約2.1mを測る。最終面では北半には円形の凹みがあり、北半と南半で約15cmの比高差がある。北半では炭の膜は非常に薄く、断面でもほとんど認識できない。一方、南半では炭層(2層)が発達しており、その厚さは3cmである。その下層、3・4層では左上がりの薄い炭層が複数単位

認められた〔巻首図版 4 中〕。また土手を形成する盛土の下面にも炭が膜状に入り込む状況を、東西土層断面西半と南北土層断面南半で確認した〔巻首図版 4 下〕。土手は多くの部分が地山（明黄褐色土）を利用したものであるが、南西部に限っては遺構埋土とみられる褐色土を利用している。さらに炉の縁地の地山がわずかながら土手状に高まっていることから、最初の土手は地山削り出しによる可能性が高い。

以上から、炉の変遷を復元すると以下のとおりである。

- ①地山を削り出して、低い土手を造る。その内側は土手の頂点から 5cm 程度掘りくぼめる。
- ②さらに炉を全周するように盛土で土手を形成・補強する。この段階までは炉の内側は丸い凹みである。
- ③炉内部に東西方向に 5 層が堆積する。
- ④南半に炭がたまり、北半との高低差が増していく。

特に④の段階では、炉の北半と炭が厚く堆積する南半で機能の分化が生じている可能性が高い。

出土遺物のうち、有稜高杯、碗形高杯を図化した（46・47）。特に 47 は炉の 2 層（炭層）からの出土である。ほかに底部が非常に小型化したタタキ甕、無文の二重口縁壺や胎土が暗褐色を呈する搬入土器の小片、少量のサヌカイト剥片を確認した。炉からは鉄器片〔写真図版 14-M2〕が出土した。器種は不明である。また炉の土手上面に石が据わっていたが、機械掘削の際に重機の重みで押し込まれた可能性もある。

出土遺物の帰属時期は庄内式併行期である。

## SH1

調査区南東部で検出した。SK16・SK21・SK22・SK23・SK24・SK25・SH2 を切り、SB1 に切られる遺構である。

平面形は検出段階で一辺約 4.5m の方形を呈し、全体の約 3 分の 1 が調査区外である。角はほぼ直角に屈曲していた。

検出面から床面までの深さは 5cm である。

周壁溝は外側、内側の 2 重みられる。内側の周壁溝は一辺約 3.6m で全周するわけではなく、西半部のみにもみられた。一方、外側周壁溝は一辺約 4.5m で全周する。両周壁溝は、南・北・西辺が平行しているものの、北辺間の距離が 0.8m、南辺間の距離が 0.3m と南に大きく偏っている。これら二重の周壁溝の存在から、建物の建て替えない拡張がなされたことがわかる。以下、内側周壁溝とそれに伴う柱穴を SH1（古）、外側周壁溝とそれに伴う柱穴を SH1（新）と呼称する。なおこの新旧関係は、SH1（新）に伴う炉の下で SH1（古）の柱穴 P3 を検出したことと、以下に記述する貼床と周壁溝の関係性から判断した。

東西土層断面（図 15：D-D'）で内側周壁溝の上に地山である明黄褐色土を含む土層（4 層）がみられた。これは貼床の可能性が高く、少なくとも東西土層断面の南側ではその広がり確認できた。ただし、埋土掘削の際にこの土層も一緒に掘り下げてしまったため、内側周壁溝と外側周壁溝を同一面で検出する事態が生じた。

### ①SH1（古）〔図 14〕

周壁溝の一辺約 3.6m の方形竪穴建物である。

検出面が SH1（新）の床面であるため、本遺構に伴う埋土は周壁溝埋土のみである。屋内施設は周壁溝、柱穴を確認した。

周壁溝は西半のみに認められ、北辺・南辺ともに南北土層断面まで続かない。周壁溝は幅約 10cm、深さ約 10cm である。

柱穴は4基確認した。いずれも掘方の平面形は円形である。P1以外はSH1(新)床面での検出ができておらず、下部遺構の掘削時に確認した。なお、各柱穴の深さは周壁溝検出面からの復元深度を記す。P1は掘方径約30cm、検出面からの深さは約30cmを測る。P2はSK26の完掘時に確認した。掘方径約30cm、検出面からの深さは約0.6mを測る。P3はSH1(新)に伴う炉の掘り下げに際して確認した。掘方径約20cm、検出面からの深さは約0.5mを測る。P4はSK22の掘り下げにともなって確認した。掘方径約20cm、検出面からの深さは約0.6mを測る。柱穴間距離はP1-P2間で約0.6m、P3-P4間で約1m、P2-P4間で約1mを測る。P2・P3・P4は正方形に並んでいるがP1の位置のみ外れており、深さも他と比べて浅い。

時期を特定しうる遺物は出土していない。ただしSH1(新)の周壁溝と平行している点を勘案すると、SH1(新)とそれほど時期差があるとは考えにくい。

## ②SH1(新) [図15]

一辺約4.5mの方形竪穴建物である。

検出面から床面までの深さは5cmと非常に浅い。また東西土層断面(D-D')では、厚さ5cmの貼床(4層)を確認した。

屋内施設は周壁溝、柱穴、炉を確認した。

周壁溝は全周し、幅は5cmから10cm、深さは5cmから10cmである。南西角に突出部がみられるが、その性格は不明である。

柱穴は2基確認した。本来4本柱と考えられるが、残り2基の柱穴は調査区から外れている。いずれも掘方の平面形は円形である。なお、各柱穴の深さは床面からの復元深度を記す。P5はSK24の掘り下げに伴って確認した。掘方径約20cm、床面からの深さは約0.5mを測る。P6はSK22の掘り下げに伴って確認した。掘方径20cm、床面からの深さは約25cmを測る。柱穴間距離は、約1.4mを測る。

炉は2種類存在する。一方は平面形楕円形、長軸0.65m以上、短軸0.5m、床面からの深さ5cmの掘方を伴う。このくぼみの埋土上面に炭が堆積していた。炭はこの1単位のみである。他方はそのすぐそばで検出した。径約40cmの範囲が赤く焼けしまっていた。これらの炉には土手は伴わない。

出土遺物のうち甕、高杯、小型丸底壺、鉢を図化した(48~57)。そのうち、48・49・56は床面上の土器である。ほかに胎土が暗褐色を呈する細頸壺、高杯、甕を小片ながら確認している。これらは搬入土器である。

出土遺物の帰属時期は概ね布留式期である。

ほかに1層からは不明土製品が2点出土した〔写真図版15〕。1は長軸5.5cmを測る。よく焼けしまっており、にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。胎土には0.5mm大の砂粒を含む。角材状のものがあつたような断面「L」字形の凹みが一部にみられる。2は1の倍ほどの大きさである。1と同様によく焼けしまっており、にぶい橙色(5YR7/4)を呈する。0.5mm大の砂粒を含む点でも共通している。一面は、凹凸が激しく、縦方向にのびる凹みが4単位認められる。大きなもので幅2cmあり、棒状のものを押し付けたような形状をしている。その裏面では、ほぼ全面で粒子の細かい砂が固着したような様子がみられる。厚みは厚いところで約1cmを測る。2の表面は全体として粘土のシワや細かい罅が目立つ。本来はより大きな個体であったと思われる。明確な破断面はみられず、罅部分で分離したような形状をしている点特徴的である。その性格は不明であるが、これら不明土製品が出土した1層からは、弥生時代Ⅱ期、Ⅳ期の遺物が多く出土していることから、この時期に帰属する可能性が考えられる。

他に柱状片刃石斧片1点、石鏃片2点とサヌカイト剥片、骨片が出土した。

#### 第4節 中世の遺構・遺物

##### SB1 [図18]

調査区中央で検出した。SH1・SH2・SH3・SK4を切る遺構である。

柱穴は16基確認した。4間×4間の総柱建物である。P1-P5間は約1.6mを測る。P1-P2間は約2.5m、P2-P3間は約2m、P3-P4間は約2.5mを測る。東西方向の柱穴間の距離は一定している一方、南北方向の柱穴間では中列がやや狭いという特徴がある。

埋土は、全ての柱穴で灰白色を呈する。柱穴は掘方平面形円形で、径約20~35cmを測る。検出面から最深部までの深さは25cm前後である。柱穴には根石、根固石が認められるものがある。根石をもつのはP3・P12、根固石をもつのはP8・P16である。柱痕跡はP1~P4・P6~P9・P14・P16で確認した。太さは約15cmである。

なお柱穴のうちP14は確認調査時に完掘したビットである。P14のみ配置が大きくずれている。

出土遺物には須恵器、土師器が稀にみられる。全て小片である。須恵器は平高台碗のみがある。底部径は約5.5cmを測る。底部糸切りで高台高はごくわずかである。相生窯址群編年第3段階b-3期ないしc期にあたる(森内1995)。帰属時期は12世紀前半前後である。

#### 第5節 時期不明の遺構

##### SK1 [図3]

調査区中央東壁際で検出した。SH2を切る遺構である。

平面形は細長く、長軸約2m、短軸約0.8m、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)を呈する。時期を特定しうる遺物は出土していない。

##### SK7 [図3]

調査区南半西壁寄りで確認した。他の遺構との切り合い関係はない。

平面形は歪な円形を呈し、径約0.7m、深さ5cmを測る。埋土は褐灰色(10YR6/1)を呈する。時期を特定しうる遺物は出土していない。

##### P63 [図17]

調査区北西部で検出した。SH6を切る。

平面形はやや不整形な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.6mを測る。検出面から最深部までの深さは約40cmである。

埋土は3層からなる。1層は柱痕跡である。斜位である点に特徴がある。今回、これと共通した状況を示すビットは確認していない。

出土遺物はIV期のものが大半を占めるが、これらはSH6に本来帰属する可能性が高い。また埋土の色調からみると、弥生時代中期に帰属する可能性は低い。

その他ビット約70基も、出土遺物に恵まれておらず時期不明といわざるを得ない。ただし、埋土の色調から中世まで降る可能性は極めて低い。また出土した遺物は弥生土器にほぼ限られる。

## 第4章 総括

豊沢遺跡は古くから遺跡として認識されながらも、今までその実態の把握は進んでいなかった。

今回実施した第4次調査では豊沢遺跡の集落域の一端が明らかとなるとともに、新しい知見を得ることができた。以下3点を挙げると、

1. 集落の立地
2. 時期別の遺構の変遷
3. 生産活動

についてである。以下ではこの3点をまとめていく。

### 第1節 集落の立地

豊沢遺跡の集落が営まれた微高地に関しては第2次調査、第4次調査等の成果から以下のように考えることができる。第4次調査区では、西壁沿いで砂礫層・砂層がみられ、東ではその上に明黄褐色土層が堆積していた。これらの検出面は標高約9.1mである。東壁付近に設けたタチワリ内では、標高8.35mで先述の砂層を確認した。東・西壁際で標高差約0.8mを測る。以上から、豊沢遺跡が営まれた微高地は砂礫層・砂層の高まりに明黄褐色土層が堆積して形成されたものと考えられる。また第2次調査で確認した微高地の最高部は標高約8.7mで、第4次調査では標高約9.1mで地山を検出した。現状の調査区間標高差は約40cmである。ただし堅穴建物が深さ10cmになるまで削平を受けていることから、本来の微高地の標高は今よりさらに高かったことがうかがえる。

また兵庫県播磨高等学校の南の道路で実施したガス管埋設工事に伴う立会調査（調査番号：20120096）では、標高約8.9mで明黄褐色土層（地山）を確認した。第4次調査区との比高差は20cmである。このことから豊沢遺跡が営まれた微高地が南へゆるやかに傾斜していることがわかる。

ほかに第2次調査区から北へ約30mの地点で実施した試掘調査（調査番号：20120368）では、標高8.5m前後で明黄褐色地山を確認し、地形が南に傾斜している様子がみられた。またシルト層と砂層の互層状の堆積が認められたことから、第2次調査で検出した落ち込みに対応する北側の傾斜部分であると考えられる。

以上をまとめると、第4次調査区の北西角から第2次調査で確認した微高地の端までは約21mを測り、今回の調査区が微高地の縁辺部にほど近い場所に当たるといえる。このことから微高地の端近くまで集落が広がっていたことがわかる。また試掘調査の成果から第2次調査で確認した微高地際の落ち込みは北東方向、現在の兵庫県播磨高等学校校舎の方へ延びるものと推測される。また調査前史でふれた高校近辺で確認された「黒色有機質土」もこの落ち込みの堆積層であろう。

このことから豊沢遺跡に営まれた集落域の中心は4次調査区の東に広がるものと考えられる。

### 第2節 時期別の遺構の変遷 [図19]

今回確認したピットと中世の総柱建物を除く、堅穴建物7棟、土坑21基のうち、堅穴建物3棟と土坑16基は弥生時代中期に属す遺構である。今回検出した遺構のうち数の上では、この時期のものが圧倒的多数を占める。そのうちIV期に属すのは遺物が少なく帰属時期が不明確なSH5を除くとSH6、SK8、SK22、P46のみで、それ以外の多くはII期に属す。II期の特徴は、残された遺構が土坑に限られる点にある。

また先述以外の遺構、堅穴建物4棟と土坑3基は庄内式併行期から布留式期に属す。この時期の特徴は残された遺構のうち堅穴建物が半数以上を占める点にある。

先述の通り、豊沢遺跡のピークがⅡ期と庄内式併行期にあるといえる。その間を埋めるⅢ期・Ⅴ期の遺構は皆無であり、Ⅳ期に関しても遺構は多くない。今回の調査区が小規模であったこともあり、あまり深く言及することは不可能であるが、時期ごとに集落域を移動させている可能性がある。また第2次調査ではSD2などからまとまった量のⅣ期の土器が出土していることから、近辺にこの時期の遺構が少なからず存在しているものと推測できる。

### 第3節 生産活動

今回、集落内での生産活動を反映した遺物が多数出土した。品目と現状での評価を箇条書きで挙げる。

サヌカイト剥片 少量であるものの、多数の遺構で確認した。石器製作がおこなわれたことを示す。

焼土塊 (SK8・SK15) 性格は不明であるが、土器焼成の覆い焼きに関連する可能性もある。

鉄片・鉄器片 (SH6, SK8, SK19, SH2) SK8・SH6から鉄片が出土したことから、Ⅳ期には鉄器がもたらされていたと考えられる。

褐鉄鉱 (SK8) 褐鉄鉱はベンガラ原料として知られている。本来磁気を帯びていないが、今回出土したものは磁石に反応する。これは高温で加熱されたことが原因と考えられる。以上から、集落内でベンガラの生産がおこなわれていた可能性が指摘できる。

ガラス滓 (SK8) ガラス滓は、化学分析から「土(花崗岩風化石)と砂(SiO<sub>2</sub>とFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を含む)と植物灰(Na<sub>2</sub>O-MgOを多量に含む)を出発物質としている可能性が高い」(藤田1994:p.223)と評価されており、そのガラス化の条件や構造については不明で、現状では「偶然的所産」と考えざるを得ないとされる。今回出土したのものに関しては化学分析をおこなっておらず詳細は不明であるが、少なくとも近辺で高火力を用いた生産活動がなされた証左といえる。

不明土製品 (SH1) SH1は布留式期の遺構である。ただし、埋土中には弥生時代のⅡ期、Ⅳ期の土器が多く含まれているため、この土製品もその時期に属す可能性がある。用途は不明であるが、鋳型に関連する可能性もある。

貨泉(和田千吉氏採集) 弥生時代の遺構に伴うか不明であるが、豊沢遺跡で青銅器生産がなされた可能性を示す。

以上、現状で性格不明の遺物でも最大限評価した内容を記した。この点の再評価は今後の課題としたい。

#### 【引用・参考文献】

- 浅田芳朗・今里幾次 1960『播磨橋遺跡発掘調査略報』  
今里幾次 1969『播磨弥生式土器の動態』『考古学研究』第15巻第4号 考古学研究会  
今里幾次 1969『播磨弥生式土器の動態(二)』『考古学研究』第16巻第1号 考古学研究会  
岡田章一編 2007『豆腐町遺跡Ⅰ』(兵庫県文化財調査報告第322冊) 兵庫県教育委員会  
高橋健自 1923『銅鉾銅剣考』『考古学雑誌』第13巻第5号 考古学  
長友朋子編 2007『新石器土器集成と編年—播磨編—』(大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号) 大手前大学史学研究所  
姫路高等学校考古会編 1964『播磨弥生式文化の研究』(オリエント創刊号) 東洋大学姫路高等学校  
姫路市史編纂専門委員会 2010『姫路市史』第七巻下 資料編考古 姫路市  
深井明比古ほか 1992『堂田・八反長遺跡発掘調査報告書』(兵庫県文化財調査報告第108冊) 兵庫県教育委員会  
福井 優 2009『小山遺跡第6次発掘調査報告書』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第4集) 姫路市教育委員会  
藤岡治子 2009『姫路市内出土の流木土器—新資料の検討—』『兵庫発信の考古学』(間壁霞子先生喜寿記念論文集(献呈篇)) 間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会  
藤田 等 1994『原料ガラスとガラス滓』『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』名著出版  
松岡秀樹 1985『姫路市鍛冶屋遺跡について—姫路地方の塵状土器—』『兵庫史の研究』(松岡秀夫先生喜寿記念論文集)『松岡秀夫先生喜寿記念論文集』刊行会  
松下 勝彦 渡辺 昇ほか 1978『播磨・長越遺跡—昭和49・50年調査報告書—』兵庫県教育委員会  
森内秀造 1995『相生壱里群における編年の再考』『相生市・緑ヶ丘壱里群Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告第139冊) 兵庫県教育委員会  
森田 稔 1986『東播磨中世須恵器生産の成立と展開—相生出古塚址群を中心に—』『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市スポーツ教育公社  
山田清朝編 2008『北条遺跡』(兵庫県文化財調査報告第325冊) 兵庫県教育委員会  
山田清朝編 2010『南歌町遺跡—西延末遺跡発掘調査報告書』(兵庫県文化財調査報告第381冊) 兵庫県教育委員会  
山田清朝編 2012『市之郷遺跡発掘調査報告書Ⅳ』(兵庫県文化財調査報告第433冊) 兵庫県教育委員会  
渡辺 昇編 2012『豆腐町遺跡Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告第403冊) 兵庫県教育委員会

表1 土器観察表

陶器番号	遺構名・部位	類別	器種	部位	色調	容積値 (cc)					調整等	備考		
						内径	口径	器高	最大径	底径				
1 SK3	4・5層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	5Y2/6 5Y2/6						外：ナゲ、内：ナゲ、オサエ			
2 SK3	1層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	5Y2/4 5Y2/6						外：ハケ目、口縁横ナゲ 内：ナゲ、オサエ	胴部に平縁竹管状破片3点		
3 SK3	1層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	5Y2/7 2.5Y2/2	径28.6				径25.4	外：ハケ、口縁横ナゲ 内：斜ハケ、オサエ	胴部に焦炭破片10点、口縁部認めらる		
4 SK3	1層	赤生土器	甕	胴部～底部	10Y8/4 10Y8/2					径28.5	10.4	外：斜ハケ、内：板ナゲ	内面には飯炊工具の角が当たった痕あり 外、外面下半は斜ハケ主体で最大径以上段ハケ、ハケ目 $\approx$ 5mm/1cm	
5 SK3	1・2層	赤生土器	甕	胴部～底部	10Y8/2 10Y8/2					径15.9	7.5	外：ナゲ、内：ナゲ、オサエ	内外面磨面あり	
6 SK4		赤生土器	甕	口縁部	10Y8/3 7.5Y8/4							外：ナゲ、内：ハケ		
7 SK3		赤生土器	甕	口縁部	10Y8/3 2.5Y8/2							不明	口縁部認めらる	
8 SK5		赤生土器	甕	口縁部～胴部	10Y4/2 10Y4/1							外：ナゲ、内：ナゲ、オサエ		
9 SK6	4・5層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	10Y7/2 10Y8/2							外：ハケ、口縁横ナゲ 内：ナゲ、オサエ		
10 SK6	1～3層	赤生土器	鉢	口縁部～胴部	10Y5/2 10Y5/2	径24.2				径7.7		外：ミガキ、内：不明	外面にスス付着	
11 SK13	1層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/4 2.5Y7/4							外：ハケ、口縁横ナゲ 内：ナゲ、オサエ	焦炭破片3条(縦文右方向?)	
12 SK13	1層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/2 2.5Y8/2	径28						外：ハケ、内：ハケ	器蓋7点、棒状浮文	
13 SK14	1～5層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	7.5Y8/4 10Y7/2							外：ナゲ、口縁横ナゲ、内：ナゲ	口縁部認めらる、外面ハケ目状磨面	
14 SK14	6層以下	赤生土器	甕	口縁部	10Y8/3 2.5Y8/2							外：横ナゲ、内：板ナゲ	口縁部認めらる、胴部に焦炭破片6点以上	
15 SK14		赤生土器	甕	胴部	2.5Y8/6 3Y8/4					径26		外：ナゲ? (縦方向磨面多数) 内：ナゲ	角肉入り、輸入品の可能性高い	
16 SK16		赤生土器	甕	胴部～底部	10Y7/2 2.5Y8/4							外：ナゲ、内：ナゲ、オサエ	焦炭破片8条(縦文右方向)、胴部に炭粉	
17 SK16	13層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/2 2.5Y8/2	径23.4						外：ハケ、ナゲ、内：ナゲ	外面にスス付着	
18 SK16	13層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y7/3 2.5Y8/3	24				22.7		外：縦ハケのちナゲ、縦方向磨面多数、内：横ハケ、ナゲ、オサエ	胴部に焦炭破片10条(縦文右方向?)、外面に炭粉付着	
19 SK26	26層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	5Y2/4 5Y8/4	径24						外：縦ハケ、口縁横ナゲ 内：ナゲ		
20 SK26	26層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	5Y2/6 5Y8/2							外：斜ハケのち底文、内：ナゲ	磨面文器体5条(単位・6条/1cm(底文右方向))、口縁部認めらる、外面に炭粉	
21 SK26	26層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/2 2.5Y8/4	径11.5				径20.8		外：磨面底、内：ミガキ	磨面文器体6条(単位・6条/1cm(底文右方向))、口縁部認めらる、外面に炭粉	
22 SK26	26層	赤生土器	甕	胴部	5Y2/6 5Y8/4							外：斜ハケのちナゲ、内：ナゲ	磨面底文	
23 SK26	26層	赤生土器	不明	胴部～底部	10Y8/2 10Y8/2						6	外：ナゲ、内：ナゲ	外面に炭粉	
24 SK25	21層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	7.5Y8/3 10Y8/2	径16.6					15.2	外：ナゲ、胴部横ミガキ 内：ナゲ		
25 SK25	24・25層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/4 2.5Y8/2	径25.4					径24.1	外：縦ハケ、口縁横ナゲ 内：ナゲ		
26 SK25	底面	赤生土器	甕	底部	2.5Y7/4 2.5Y7/4	17.3				15.2	15.6	6.8	外：斜ハケのちナゲ、口縁横ナゲ、内：ナゲ、口縁横ナゲ	外面上半にスス付着
27 SK23	4層	赤生土器	甕	口縁部～胴部	2.5Y8/2 2.5Y8/2	径21.3					径19.5	外：縦ハケ、内：ナゲ	外面上半に炭粉	
28 SK23		赤生土器	甕	口縁部	7.5Y7/6 2.5Y8/3							外：縦ハケ、内：ハケ、ナゲ	内外面に炭粉、外面には棒状の炭粉条2条、SK16・26に同一器体あり(組合せ?)	
29 SK22		赤生土器	甕	口縁部	2.5Y8/2 2.5Y8/2							外：ナゲ、内：ナゲ	口縁文	
30 SK22		赤生土器	甕	胴部	10Y8/2 2.5Y8/2							外：磨面底、内：ナゲ	磨面底文、底状文	
31 SK22		赤生土器	高杯	胴部	10Y8/2 7.5Y8/3							外：ナゲ、内：ケズラ		
32 SK6	底面	赤生土器	甕	底部	5Y8/6 7.5Y8/4	19.2				44.8	33.8	8.9	外：ハケのち横ミガキのち縦ミガキ、内：ハケ、オサエ	磨面文、底状文、磨面文器体6条(単位・6条/1cm、縦文右方向)、口縁部(1)字状穴、胴部調整は縦ハケのち板ナゲ
33 SK8	4層	赤生土器	甕	口縁部	10Y8/4 10Y8/4							外：縦ハケのちミガキ 内：ミガキ		
34 SK8	西側瓦乱	赤生土器	甕	口縁部	10Y5/2 10Y4/1						14.8	外：縦ハケ、口縁横ナゲ 内：横ハケ、口縁横ナゲ	SK2に磨面に伴う不明	
35 SK8	西側瓦乱	赤生土器	甕	口縁部～胴部	10Y8/3 10Y7/4						13.1	外：胴部横ミガキ、口縁横ナゲ 内：不明	SK2に磨面に伴う不明、胴部に1箇所穿孔	
36 SK8	3層	赤生土器	甕	胴部	10Y8/3 2.5Y8/2						径27.8	外：横ミガキのち縦ミガキ 内：ハケ	磨面文、底状文、刺突文、磨面文器体6条(単位・9条/1cm)	
37 SK8	6層	赤生土器	甕	胴部	2.5Y8/2 2.5Y8/2							外：縦・斜ハケ、内：ナゲ		

注：「原」つきの数値は還元値

発掘番号	遺構名・層位	類別	器種	部位	色調	計測値 (cm)					調整等	備考	
						外面 内面	口径	高さ	最大径	底径			
38	SK20		甕	底部	10YR5/4 10YR5/2					10.4	外：縦ミガキ、内：ケズリ	外面に黒面、内面は全面スチ付着	
39	P66		甕	体部～底部	10YR5/4 2.5YR/2					8	外：横ミガキ、縦ミガキ 内：不明	ミガキ幅2～3mm	
40	SK19		土師器	口縁部～胴部	2.5YR/2 2.5YR/2					※17.1	外：タタキのちナブ、口縁横ナブ 内：口縁横ナブ		
41	SK19	1・2層	土師器	皿	顔面～体部	10YR5/2 10YR5/4					外：縦ハケのち縦ミガキ 内：ナブ		
42	SK19		土師器	高杯	杯部～胴部	7.5YR5/4 7.5YR5/4				13.3	外：ナブヅ、内：ナブヅ		
43	SK19	2層	土師器	高杯	杯部～胴部	7.5YR5/4 7.5YR5/4				14	外：横ミガキ、内：縦ミガキ	口縁部内外面に黒面	
44	SK19		土師器	高杯	杯部	10YR5/2 10YR5/2				9.9	外：縦ミガキ、内：不明		
45	SI3-P5	1層	土師器	皿	胴部～底部	7.5YR5/4 7.5YR5/4				9.7	4	外：ハケのちナブ、腹横ナブ 内：ナブ	外面に黒面
46	SI2	1層	土師器	高杯	杯部	2.5YR7/6 10YR5/2				※14.4		不明	
47	SI2	伊1層	土師器	高杯	杯部～胴部	7.5YR5/2 7.5YR5/2				10.6		外：横ミガキ、内：不明	部分的に横方向のミガキ残存
48	SI1(簡)	床面	土師器	甕	口縁部～胴部	5YR7/6 5YR7/6				15.2		外：不明 内：口縁横ハケ状あり	
49	SI1(簡)	床面	土師器	甕	口縁部～胴部	7.5YR7/4 10YR5/2				※14.4		外：腹横ハケ、口縁横ナブ 内：不明	
50	SI1(簡)	1層	土師器	甕	口縁部	7.5YR5/2 5YR7/6				※14.2		外：横ナブ、内：横ナブ	
51	SI1(簡)	段直上	土師器	甕	口縁部	5YR7/6 5YR7/6						不明	
52	SI1(簡)	段直上	土師器	甕	口縁部	5YR7/6 5YR7/6						外：横ナブ、内：横ナブ	
53	SI1(簡)	1層	土師器	甕	口縁部	7.5YR5/2 10YR5/2				※24.6		不明	同一個体の破片に穿孔あり
54	SI1(簡)	1層	土師器	皿	口縁部～胴部	10YR7/2 10YR5/2				※8.2	※9.2	外：ハケのちナブ、口縁横ナブ 内：ハケ、ナブ	
55	SI1(簡)	伊(段)	土師器	鉢	底部	7.5YR5/6 7.5YR5/6					4.4	外：タタキのちナブ、内：ナブ	外面に黒面
56	SI1(簡)	床面	土師器	高杯	杯部	7.5YR5/6 7.5YR5/4				※15.8		不明	腹横接合痕(縁状工具刺突痕あり)
57	SI1(簡)	段直上	土師器	高杯	口縁部	5YR7/6 5YR5/4						不明	

注：「※」付きの数値は復元値

表2 石器観察表

発掘番号	遺構名・層位	器種	計測値 (cm)			石材	備考	
			長さ	幅	厚			
SI1	SK26	26層	石鏃	※2	2.1	0.6	ヤヌカイト	2.27g
SI2	SK26	26層	石鏃	※5.1	1.6	0.7	ヤヌカイト	5.58g
SI3	SK25		石鏃	※2.2	0.95	0.3	ヤヌカイト	0.61g、SI1南北タテワリ北半内出土、黒化がやや濃む
SI4	SI2	1・2層	石鏃	1.7	1.85	0.4	ヤヌカイト	0.75g、腹面未調整
SI5	SI2		石鏃	2	1.75	0.3	ヤヌカイト	0.39g、東西タテワリ内出土(SI19に伴う可能性あり)
SI6	SK26	26層	石鏃	※2.45	0.6	0.4	ヤヌカイト	内側縁に磨滅箇所(水平方向の磨痕あり)
SI7	SK3	1層	石筴丁	※7.7	4.9	0.9		穿孔2箇所
SI8	SI7		稜形石筴	※6.4	3.65	1.1	ヤヌカイト	コーンダロスあり、石筴丁転用
SI9	SK24		石筴丁	※4.65	2.75	0.55		
SI10	SK3	6層	砥石	8.2	7.15	2.4	砂岩	
SI11	SK14	1～5層	砥石	3.35	5.4	1.4	砂岩	
SI12	SK16		砥石	9.9	12.2	2.7	砂岩	上面に凹みあり(調査時についたものか?)、斜め方向の凹みは使用痕
SI13	SK30	底面	台石	18.3	8.7	8.6		使用面は平や赤みがかかる
SI14	SK20	底面	磨石	7.1	6.6	4.7		

注：「※」付きの数値は復元値